

活動レポート

青年技術士交流委員会

第 37 回日韓技術士会議参加報告・研修会報告

■第 37 回日韓技術士会議参加報告

平成 19 年 9 月 30 日から 3 日間の日程で、「第 37 回 日韓技術士会議」が韓国ソウル市内で開催されました。

また、この会議に併せて開催された「第 3 回 日韓親善サッカー大会」に北海道代表で参加してきましたので報告します。



写真－1 日韓親善サッカー大会

1) 日韓親善サッカー大会

① 韓国サッカーチーム

日韓親善サッカー大会は、会議前の 9 月 30 日にソウル市内のグラウンドで開催されました。

韓国のサッカーと言えば、国技の一つでもあり、熱狂的なファンが多く、『2002 年 FIFA ワールドカップサッカー日韓大会』では、世界の強豪国をあいっいで破り見事 3 位に輝いています。

日韓親善サッカー大会は、3 年前に事前セレモニーとして初めて開催されました。

開催の主旨は、日本と韓国の若手技術士による事前交流としたものと聞いたが、韓国の『一方的な楽しみ』に勢いで巻き込まれてしまったようであります。過去の成績は、日本の 1 負 1 分けだそうで、韓国としては、1 分けという結果に対し、非常に悔しがっているそうで、『今回は気合いの入れ方が違う』

とのことでした。

② キックオフ

韓国チームは、総勢 25 名、ソウル市内の社会人サッカーリーグに属するチームで、週 1～2 回の練習をしており、紅白試合を見ていてもかなり組織的にプレーするチームでありました。

一方、我々サムライブルーは、全国から、当日集められてきた 13 名で構成するチームであり、試合直前に初めて顔合わせする人が多いといった感じです。

試合当日のソウルは曇りで、前日に降った雨のせいか、ピッチコンディションは悪く、アウェーの我々にとっては、試合前から非常に不利な状況でありました。

このような状況の中、無情にもキックオフの笛はなりました。



写真－2 日本代表（U－60）

③ 試合結果

試合は 30 分ハーフで前半行われたのですが、試合開始から、韓国の組織的なサッカーに、我がサムライブルーは終始押されぎみの状態が続きました。

結果は 0－4 で日本チームの負け、今年は惨敗を喫してしまいましたが、今回のチーム状況からすれば、これでも善戦したとのことでした。

日本 0（前半 0－2 後半 0－2）4 韓国

④ 反省会

試合後は、水しか出ないシャワーで敗北の洗礼を受け、韓国の勝利と日本の反省を踏まえた親睦会(反省会)がソウル市内でありました。

反省をしなければならない我がチームは、昼間とは別人のように、飲む勢いと量は韓国チームより優勢であったように感じます。

言葉は通じなくともスポーツでの交流というのは、非常に親近感を感じました。



写真－3 反省会(右韓国)

2) 日韓技術士会議

親善サッカーの翌日に日韓技術士会議は開催されました。第5分科会は、韓国側の朴委員長、日本側の時合委員長のあいさつで始まり、双方数名の青年技術士が自国の技術について、熱い講演を行いました。

3) 産業視察

会議の翌日、韓国ガス公社、仁川大橋建設現場、



写真－4 第5分科会

清流川文化館の見学を行いました。

仁川大橋は急ピッチで建設されており、仁川自由エコノミーゾーンと仁川空港をつなぐ海上橋です。ソウル経済の発展には必要不可欠な大型橋です。



写真－5 仁川大橋

清流川は、ソウル中心部の高速道路を取り壊して河川を復活させたプロジェクト河川です。



写真－6 清流川

4) おわりに

最初から、体力的に悲鳴をあげた日韓会議でありましたが、青年交流委員会としては、親善サッカーのおかげで、非常に有意義なものでありました。

来年は、新潟開催を予定しており、またしても親善サッカーを予定しているようであります。

このままでは、日本の初勝利は極めて遠いものと感じますので、来年は韓国と互角以上に戦える同士を募って臨みたいものであります。

(文責：青年技術士交流委員会 副委員長 樋詰)

■テクニカルスクール開催報告

(平成19年10月3日18:00・KKRホテル札幌)

技術者として様々な形式の会議を運営する機会があるかと思います。しかし、会議の参加者は専門知識の理解レベルや立場が異なる場合も多く、参加者間で議題に関わる情報の共通理解を図ることさえ難しい場合がないでしょうか。

10月3日に開催した夏季テクニカルスクールでは、よりよい会議の場を構築する方法を学ぶことを目的とし、北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット(通称CoSTEP)の三上直之特任准教授を講師としてお招きし、「会議の場のデザイン」をテーマとした演習を行いました。参加者は22名でした。

三上先生の所属されているCoSTEPは、科学技術を一般の人にわかりやすく伝える役割を果たす人材の育成組織です。子供達の理科離れや高度に専門化した科学技術をめぐる社会的な諸課題を解決するために、科学技術の専門家と市民との間を橋渡しする人材を育成することを目的とし、文部科学省の科学技術振興調整費によって平成17年より北海道大学に開設されました。現在授業の一環として月1回サイエンスカフェ札幌を駅前の書店で開催するなど多方面で活動されています。

今回のテクニカルスクールは、CoSTEPで実際に行われている授業をベースとした演習として企画し、「会議を活性化するためには、どのようなプロセスを仕掛けて行くべきか」をテーマとして、技術者が日頃関わる「会議」を題材に参加者間でブレインストーミングを行いました。私たちが抱える会議の問題点についてグループで話し合い、最終的に良い会議をつくるための解決策を提案することがこの演習の到達点となります。

今回の研修会では、三上先生の自己紹介と演習内容の説明の後、早速5・6人のグループに分かれて話し合いを開始しました。まず自分の考える会議の問題点を紙に書き、自己紹介とともにグループ内のメンバーに説明していきます。それらを付箋に書き込みながら会議の抱える問題点についての情報を共

有し、整理しました。次に問題点に対する解決策について話し合い、用意した模造紙に付箋紙を貼り、説明を書き込みながらファシリテーショングラフィックとしてまとめていきました。最後に、各グループで話し合った結果を順に発表し、参加者全員で情報の共有を行うとともに、三上先生より会議の場をデザインする上でのポイントの説明と、演習の総括を頂きました。



写真-1 テクニカルスクールの様子

このような作業を通して、あらゆる会議に共通の4つのステップを意識するとともに、話し合いを行うグループの人数の設定などによって、準備の段階から会議をデザインする発想が重要であることを学びました。また、質問カードを使い、文章で質問を受け付けることで、質疑応答をうまくコントロールするテクニックなど、実際の会議の運営に役立つスキルも参考となりました。

参加型の演習ということで、全体的に議論が盛り上がり、時間も不足してしまいましたが、「会議を題材に会議をする」という演習は、貴重な体験になったかと思います。

今後は、今回の研修内容を発展させて、合意形成や会議の場での技術者のコミュニケーションのあり方をテーマとした演習型のテクニカルスクールをシリーズ化して企画していく予定です。

(文責：青年技術士交流委員会 福岡)

■講演会開催報告

(平成 19 年 11 月 20 日 15:00・KKR ホテル札幌)

『北の新エネルギーの現状と今後の展開』をテーマに、平成 19 年 11 月 20 日 秋季研修会が行われました。船越技術士より『新エネルギーへの取り組み～北海道の現状と展望～』、北海道大学松田教授より『北の新エネルギーの現状と今後の展開方策』と題したバイオマスを中心とした講義をいただきました。

来年の洞爺湖サミットの開催も決まり、道内における環境問題への意識が一層高まっていることが多くの参加者からも感じられる研修会となりました。



写真－ 8 船越技術士



写真－ 9 北海道大学 松田教授

講演では、新エネルギーの定義から始まり、京都市議定書、バイオマス、そして北海道における展開と基本的な事項から我々の今後の活動への指針となる話題が展開され、非常に興味深いものでした。

環境問題から注目を集めるバイオマスですが、バイオエタノールの生産については、生産・投入に対するエネルギー効率が必ずしも良いとは言えないことや、食用穀物の利用により食糧問題を引き起こすことも懸念されるといった様々な課題があるとのことでした。

一昔前までは糞尿による環境汚染が問題でしたが、現在は、家畜糞尿対策の一環として、道内各地で家畜糞尿によるメタンガス生産に取り組まれる事例が増えているとのことでした。(道外では污水处理の一環としてバイオガスプラントを活用し、浄化装置のエネルギー源として利活用している事例もあるとのこと)

いずれにせよ、バイオマスの取り組みについては、エネルギー効率性の問題など、現段階では課題も多く、小規模生産・消費、地産地消などのバイオマスエネルギーに適した運用システムを構築する必要があることが示されました。

その一方で、エネルギー政策において海外との交渉のカードとしてバイオマス技術の重要性を挙げられ、バイオマス生産に関する技術の蓄積と伝承の必要性や、休耕地(特に水田)を保全し、いつでも農作物が生産可能な状態を保持していくことで、国内でのバイオエタノール生産に長期的に取り組んでいくことが必要であることについてもご提案されました。

また、海外でバイオマスの活用が進んでいる一番の要因は生産農家に対する補助金の有無であり、国内においても補助金がなければバイオマスの開発は進まないだろうという話には、非常に考えさせられました。



写真－10 講演会の様子

今回の研修会では学生の参加もあり、懇親会でも技術的な話題が青年技術士と学生の間で交わされていました。今後も、学生や一般市民を含めたより多くの方々が参加していただけるような魅力ある講演会等を企画していきたいと考えています。

(文責：青年技術士交流委員会 長谷川)